

高大連携講座「結びつく世界をどう学ぶか？Ⅰ

—12世紀から14世紀のユーラシア—報告

報告者：松木、福本、中山

高大連携講座は、歴史分科会の主催で毎年行っている高校生のための世界史の講習会であり、高校教員の研修会でもある。この3日間の連続講座では、午前中、高校教員が60分、大学教員が90分の授業を高校生向けに行う。そして午後は、授業者と高校教員で研究協議会を行う。これまで、アジアやヨーロッパなど地域を絞ってやるが多かったが、昨年度は今年度からの世界史探究で地域のつながりが重視されることも踏まえて、ユーラシア全体という広い地域をテーマにした。中央大学横浜付属高校を会場に、実に多くの高校生、教員に参加していただき、充実した買いになったと思う。

この講座では、3日間全体のテーマを踏まえて各日のテーマが設定される。そのテーマに基づいて、高校・大学の教員は授業を行う。各日のテーマを紹介しよう。

8月9日「12～14世紀のユーラシア東部」

講師：松木美加（県立横須賀大津高校） 向正樹（同志社大学）

8月10日「12～14世紀のユーラシア西部」

講師：野々山新（愛知県立大府高校） 高田良太（駒澤大学）

8月11日「12～14世紀の経験とユーラシアの道程」

講師：福本淳（栄光学園高校） 古谷大輔（大阪大学）

今年度は8月8日から10日の3日間で、鎌倉学園でやることが決定しているので、ご関心のある先生方は参加していただきたい。それでは、各日の授業や研究協議について、報告させていただこう。

1日目：8月9日（火）「12～14世紀のユーラシア東部」

（執筆：松木美加（県立横須賀大津高校））

はじめに

「12～14世紀のユーラシア東部」とは、どこからどこまでの地域を指すのか。何に焦点を当てれば、その特徴や「結びつくユーラシア」を理解することができるのか。高校の授業現場では「13世紀はモンゴルの時代」と教えられ、高い軍事力をもつモンゴル勢力によってユーラシアの東部の支配・統一が行われたと理解する高校生は多い。そのような理解は簡潔だが、ではなぜモンゴルは高い軍事力をもったのか？モンゴルと諸地域の交戦・交流は、諸地域に何をもたらしたのか？という問いには答えられるだろうか。

1日目の高校・大学の授業では「ヒト・モノ」に関する諸資料が多数活用された。この「ヒト・モノ」はユーラシア西部（2日目）でも登場するものが多く、全体のテーマ「結びつくユーラシア」を考えるうえで重要な材料となった。

高校教員による授業（授業者：松木美加（県立横須賀大津高校））

「13世紀、東部ユーラシアの統一は『何によって』もたらされたのだろうか？」をメイン課題とした。参加した生徒たちは高校1年生から3年生までと幅広く、前提知識にも差があるため、導入では12世紀・13世紀のユーラシア東部の歴史を、地図を用いて整理した。12世紀の勢力図を確認させたうえで、モンゴルがどのような地域を支配下においたの

かを、地図に図示させることで把握させる。「短期間で広大な地域を支配したモンゴルは凄い」という素朴な感覚と、「その凄さの裏には何があるのか？」という素朴な疑問を持たせることも狙いの一つである。

諸資料は全部で15点を提示し（全てを時間内に扱うことはできなかった）、問いと資料を通して、ユーラシア東部の結びつきを縦軸（時間）と横軸（地域）で考察させることを狙いとした。例えば蒙古襲来絵巻に見られるモンゴル軍の火薬兵器。宋代三大発明の1つである火薬。遼・西夏・金への歳幣となった銀。中国で庶民が使用した銅銭。日本が銅銭を輸入し硫黄を輸出した日宋貿易。教科書や資料集に記されるような「ヒト・モノ」が、互いに随所で結びついていることに気づかせることができた。

大学教員による授業（授業者：向正樹（同志社大学））

大モンゴル時代の軍事技術・食にまつわる伝播の事例をクイズ形式で紹介し、生徒の素朴な疑問・関心を次から次へと引き出していく授業であった。「ブルー・アンド・ホワイトで飲むミルクティーは英国風の文化だと認識誤解されている」という事例は、生徒もそのイメージを強く持っていたようだ。どんなデザインがヨーロッパに影響を与えたのか？モンゴルでは何が飲まれていたのか？1つの事例から次の問い・事例へと繋がっていく。

向先生は授業の中で、「BTN分析」(Boundng Transmit Network Analysis)と呼ばれる独自の分析手法を教えてくれた。「アクタント」(人・生物・モノ)のあいだを技術・アイデア・イメージ等が「伝播」する。その伝播を可能とするのはアクタントの間で結びつく「ネットワーク」である。かなり離れた時代・地域に達しているような伝播の現象(「バウンド」)として追っていく。この手法を用いて、食文化史においては、和菓子として知られる「ういろう」が、モンゴル時代の海域交流を背景に日本に伝わっていることを取り上げた。また、バグダード包囲・南宋包囲の際に使用された「投石機」についても、BTN分析によって黒死病の伝播やルネサンスへと結びついていく。時系列で並べられたスタイルではない、時代や地域を越えたダイナミックな連関を考える、刺激的な世界史の見方を与えてくれた。

研究討議（登壇者：松木美加、向正樹）

高校・大学ともにモノに注目した授業だったため、それに関連した質問が多くでた。一方で「こんなモノがあつてね」と話して面白いと思うのは教員だけで、生徒の多くは関心を持ってない。歴史総合・世界史探究が始まるなか、私たちは生徒に「歴史で何かを考えさせる」力を身に付けさせる必要がある。「モンゴルで何があつた」「こんなモノが使われた」という事実は当たり前として、「それらを学ぶことを通して、生徒に何を学び取ってもらいたいのか」が重要ではないか。今回のテーマだと、モノを通じて「結びつき(統合・ネットワーク)」を学び取ってもらいたいわけだが、複数の視点が必要だったり、一言で言い表せなかったり、一筋縄ではいかない難しさがある。

また、生徒が学びたいことと教員が教えたいことにズレが生じることがあるが、それは重要な課題であるとの指摘があつた。生徒にとってのレリバンス(関連性・有意性)は個人的なものや社会的なものがあるという。教室空間で共有できる社会的関心事を軸に、問いを設定したり、何を取り上げるか(網羅するのではなく)を選択したりすることが求められる。

2日目：8月10日（水）「12～14世紀のユーラシア西部」（執筆：松木美加（県立横須賀大津高校）

はじめに

12～14世紀のユーラシア西部といえば、十字軍、アイユーブ朝の台頭。教皇権の絶頂、モンゴルの侵入、アッバース朝滅亡、マムルーク朝の台頭。英仏で王権伸長、ティムール・オスマンの台頭など、ヨーロッパ（キリスト教圏）と西アジア（イスラーム圏）の二項対立で描かれがちである。しかし、二項対立という見方は適切とはいえず、実際はもっとモザイクな関係が広がっていて、対立に見える関係の中にも結びつきがある。

高校教員による授業（授業者：野々山新（愛知県立大府高校））

野々山先生の授業は、端的で、かつ切実な問いから始まった。「今、平和ですか？」ロシアとウクライナの戦争が起こる今の世界、平和を阻害するものは何か。導入に2つの資料を読み、歴史の捉え方には「単線的な歴史像」と「複線的な歴史像」があることを認識させる。授業のめあては「今必要とされている歴史像を考えよう」。

授業は図・表・文字など14点の資料と問いで構成されており、導入でとりあげた2つの「歴史の捉え方」について、諸資料がどのように作用するかを考察させる。教員の問いかけ、生徒同士の対話を通して、生徒は歴史を捉える視座を身に付けていく。キリスト教圏とイスラーム圏で色分けされたイベリア半島の地図はどうか。「イスラームが減っている」「交流しているかもしれないが、それは読み取れない」など、生徒同士で対話する。色で塗分けられないことがあること、資料から読み取れる／読み取れないことがあることに、生徒自身が気づいていく。最後に、導入の資料・問いをグループで再度考察させ、生徒たちの認識の変化をまとめさせた。あるグループは「対立と共生、国と一つで考える」から「異文化の意識の両面性」「主語の大きさに疑問を持った」と表現した。

12～14世紀のユーラシア西部の歴史を扱って、国家と人々の戦争をどう捉えるかという現代的な課題を考えさせる。世界史探究を意識した授業で、深い学びをしている生徒たちを見取ることができた。

大学教員による授業（授業者：高田良太（駒澤大学））

高田先生が専門とするクレタ島は、小さな舞台かもしれないが、古代ローマ帝国・ビザンツ帝国・オスマン帝国など支配者が変遷してきた歴史をもち、多様な宗教・文化圏の「境界域」にある。島嶼における異宗教／異宗派の共生や、地中海とその外（ユーラシア中央部）との接続について、クレタ島を舞台に「隔てる海／繋げる島／環の外側」と題し、地図資料などを多数活用しながら高校生たちに語った。

私たちは“〇〇人”という言葉を用いるが、〇〇人＝エスニシティは必ずしも「国民」を表すものではない。高田先生が言うには、宗教や言語に立脚することが多く、居住地域と一致しないことがある。中世クレタ島の人々は“ギリシア語を話す正教徒”であったため“ギリシア人”と認識していたようだ。第4回十字軍によりビザンツ帝国が中断すると、ヴェネツィア領クレタが成立し、多くの“ヴェネツィア人（カトリック・ラテン語）”がクレタ島に入植した。図資料からは、13世紀は旧市街＝ヴェネツィア人（カトリック）、郊外域＝ギリシア人（正教会）とすみ分けがされていた教会分布が、14世紀には混在していたことが読み取れる。一方で、異宗派婚に際して改宗しても建前であるという事例からは、「るつぽ」というより「サラダボウル」的共生であったと考察される。

また、ワールシュタットの戦いは「カトリック」対「モンゴル人」の構図をイメージさせるが、神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世の檄文には、クレタ島をはじめ異宗派共生の地

にも呼びかけられている。地中海を境界として「ヨーロッパ世界」は完結されたものと認識しがちであるが、実際にはモザイク状に広がる境界域があり、線引きして捉えることは困難であることを示してくれた。

研究討議(登壇者：野々山新、高田良太)

「12～14 世紀のユーラシア西部＝宗教／宗派、民族などがモザイク状に存在していた」という認識を軸に授業が展開された。生徒の感想や質問も、様々な対立を乗り越えようとする表現が多数見られ、授業の成果・生徒の学びを見取ることができた。出来事や用語の解説は一切なく、問いと資料を読んで対話を繰り返すという、野々山先生の授業手法に圧倒された参加者が多い印象であった。1 日目でも議論された「何を学び取ってもらうか」について、明確で限定された目標があれば、扱う内容の取捨選択が可能となる。

また、共生やエスニシティをめぐる議論も活発であった。「宗教の違い＝対立」とか「共生＝良いこと」と捉えるのも二分的で、「対立や共生にも様々な要因がある」ことに触れていくことが求められる。ヴェネツィア領クレタ島のエスニシティからは、「1つの民族＝1つの言語・宗教」の概念が崩された感があった。一方で、多様な社会から1つのエスニシティが形成されることもある。ではどの局面でサラダボウルがるつぽになるのか？はじめから“〇〇人”という存在があったのではないし、同じ“〇〇人”でも全員が同じ意識を持っているわけではない。現代社会でも似たようなことが言え、歴史総合において考えたいテーマである。

3 日目：8 月 11 日 (木)「12～14 世紀の経験とユーラシアの道程」(執筆者：福本淳(栄光学園高校))

はじめに

三日目の担当は、私(福本淳、栄光学園中学高等学校)と、古谷大輔教授(大阪大学)の二人。私たちに与えられたテーマは「12～14 世紀の経験とユーラシアの道程」である。前二日が地域的な広がりや問うのに対して、この日は過去から未来へと時系列的なつながりを問う。

初期の高大連携では、高校教師の講義は、大学教授の講義の「前座」的な役割が強く、高校生たちへの史実の確認の面があった。ただ今年に限っては、テーマが時間的にも空間的にも非常に広い範囲を扱うので、前座として知識の整理を行うという形式は合わないと考え、古谷教授の了解は得たうえで比較的自由に発想した授業を行うことにして準備を進めた。ただ、このときに重要なヒントになったのは、メールのやり取りの中で古谷教授がおっしゃった「過去はスクラップ&ビルド」されていくという言葉だった。では見ていこう。

高校教員による授業(授業者：福本 淳(栄光学園高等学校))

第1のテーマ「マグナカルタとそれから」。イングランドはノルマンコンクエストを経験したことで当時のヨーロッパに珍しい、中央集権的な政治体制を持っていた。フランスからアンジュー家が入ってプランタジネット朝が成立すると、王権はますます強化された。強い力を持つ国王は、イングランドの発展に資する部分もあったが、問題もあった。13世紀初頭、ジョン王の失政がそれだ。これに対して貴族たちが結束して王を打ち破り、約束させた文書が1215年のマグナ＝カルタなのだが、約60条にわたるその内容の中で今日、注目されているのは、貴族会議の同意を経ずして増税はできないとする条項と、王といえども司法権力を行使して自由人を処罰することができるのは、法律に反した場合のみであるという二項目である。この二項目は、17世紀に入って議会在王と対立すると、権利の請

願の下敷きとなり、さらに名誉革命を経て権利の章典にも影響を与えた。ジョン・ロックの『統治二論』は、イングランドの歴史的な文脈を踏まえていないと理解しにくい名誉革命や立憲王政を、世界中の人々に理解できるような洗練された一般論へと昇華させる試みだったといつてよい。そして、このような事実から、第1の論点が引き出される。歴史は単純に継承されるというよりは、一度忘れ去られていたものが想起され、時代に合わせて再利用される。まさにスクラップ&ビルドされるのだ。マグナ・カルタが封建的な文書だったことは、当時の人々が知らないはずはなかったろうが、そのエッセンスの中に自分の権利を正当化するための価値があると考えたのだろう。

第2の論点としてはチンギス・ハンの覇業とその影響である。チンギス・ハンとその子孫によって築かれた大帝国は、最終的には、分裂しつつも緩やかな連携を保ち、帝国全体の統括者である大ハーン（ハーン）と、各地の王国を運営するハンの二段階的な構造を持った。そしてチンギス・ハンの活躍が少なくともモンゴル人やモンゴルの影響を受けた内陸アジアの遊牧民たちにとって、非常に輝かしいものだったからだろうか、モンゴル人の間ではその後長くハンやハーンはチンギスハンの男系子孫しか名乗ってはいけないという不文律が生まれた。いわゆる「チンギス統原理」である。これはさまざまにアジア史に影響を与えた。15世紀に明に大勝利をおさめたエセンは、モンゴル人ではあるがチンギスの血統ではない。そして覇権を確保した彼は、機は熟したとばかりに大ハーンを名乗ってしまうのだが、おそらくそのことへの反発もあって臣下の反逆にあい身を滅ぼした。やがて中国東北地方から女真人が興起すると、彼らは一部ではあるがモンゴルや漢人をも支配下に組み込んでいき、東モンゴルの部族に代々受け継がれていた元の皇帝（大ハーンである）が使っていた印章を入手したことを重要な機会として「後金」から「大清」へとステップアップしていくのだ。

なお、清朝絶頂期の皇帝は、モンゴル人に対しては大ハーンとして、漢民族に対しては儒教的教養あふれる中華専制国家の天使として、チベット仏教の檀家として、それぞれの民族から忠誠を得やすいように多くの顔を使い分けながら大領土を巧みに統治していくのである。このような強固な軍事力（固い核）と、支配下諸民族に対する柔軟な支配（やわらかい広がり）という構造も、13世紀のモンゴル帝国のノウハウがのちの時代に形を変えつつも継承され、再構築されていった例といえる。講義の最後に、生徒たちへ考えてほしいテーマとして、以下のようなことを指摘した。「清朝のような専制国家では、皇帝がいくつもの顔を使い分けることで他民族を、縦割り式に、巧妙に統治した。しかし近代民主国家では、均質な権利や義務を持つ国民が自由な論議をへて政策を決定していかなければならないので、多民族国家は意外に難しい問題を抱えてしまいがちだ。多民族国家で民主的な政治は可能だろうか、考えてみてほしい」と投げかけてみた。

大学教員による授業(授業者：古谷大輔先生(大阪大学))

後半は大阪大学教授・古谷大輔先生の講義である。古谷氏は、冒頭、レジュメに添付された地図や、銀河英雄伝説などのサブカルチャー系の話題を素材に君主政治と民主政治、機動戦士ガンダムで敵側の国家として描かれるジオン公国などにふれたのち、本題に切り込んでいった。西洋ではよく出てくる「公国」。アジア的な考え方だと皇帝のような上位の権力（皇帝）から「公」に任命された人が治める国というイメージだが、西洋史における「公国」には住民から選ばれた人が治めるという含みがあるという。たとえばスウェーデンとデンマークの王権が争奪戦を演じたスコーネ地方は、最終的にデンマークから奪い取ったということ以上に、スウェーデン王がスコーネの地域政体を承認し、またよりよく地

域の安全を保障する権力として住民の信頼を獲得した結果、スウェーデン領になったのだという。このように西洋史における「公国」「王国」は、絶対的な権力ではなく、「人々の権利を法として認める」という点を重視した「王のいる共和政」ともいうべき政体だというのだ。共和国の英語訳は republic、その語源はラテン語の respublica で、res は物事、publica は公共を指すので、王がいるかどうかは重要ではないのだ。そしてこのような認識は、13～14 世紀にイスラーム世界から逆輸入の形で、アリストテレス哲学がヨーロッパに入ってくる中で、その公共哲学、つまり最高善（徳）とは、よい生活を皆に保証する公共性のようなものを指し、それを人々に保証するのが国家の責務だという思想が入ってきたことで形成されはじめ、18 世紀までかけて完成したものだという。また史料面では、17 世紀から、世界を旅したヨーロッパ人の旅行記などに、住民の権利を反映した法治国家としての西ヨーロッパ諸国と、君主の恣意によって運営されるヨーロッパ外の世界の差に言及する記述が登場するようになるという。ちなみに君主の恣意による国家を「専制国家」といい、非常に悪いニュアンスで使われるのだそう。むしろ「独裁」のほうが、やむを得ない状況での非常時大権という、ややプラスのニュアンスで使われることが多いという。古谷先生はここまで語って、舞台を日本に転換し、鎌倉幕府など武家政権における「本領安堵」なども住民の権利を保障する仕組みが構築された例として考えられるとし、さらに高度な権利保障を行う政治機構として武家政治が室町幕府へとバージョンアップしていったのではないかとした。さらに翻ってヨーロッパのその後を考えるなら、「王のいる共和政」を一步推し進め、もっと緊張感のある権力の相互監視、腐敗や専制の防止策として、モンテスキューが三権分立を思いついたのではないかと説いた。

おわりに

3 日目について、私の反省点としては、話題が英国とアジアに分かれてしまい雑駁になった感は否めない。私と古谷教授との連携はぎりぎり成立していたといったところか。なお参加した生徒たちのレベルの高さには本当に脱帽である。彼らの未来の幸福を願ってやまない。